

海外便り

井村 君江

(協会顧問・明星大学教授)

* 3月5日 ロンドンで Royal Ballet のプリマ・バレリーナ Lesley Collier のインタヴェューを済ませ、Royal Shakespeare Company が史上はじめて Wilde の *Woman of No Importance* をバービカンで上演しているはずと問い合わせところ、現在はグラスゴーで公演中とのこと。昨年9月から4月までエディンバラ、シェフィールド、リッチモンド、パース、リーズ、パーミンガム、カーディフ、そしてブライトンと巡業をつづけているようで、計算してみると上演回数は138回、Wilde 劇が伝統あるシェイクスピア俳優の手によって、この世紀末のイギリス各地に広がっているわけである。

* 3月10日 コーンウォールのマラザイアン、ロンドンから汽車でも6時間南西に走った半島の港町。The Cornishman という地方新聞を開けると、“Out and about” という情報欄に Wilde の名前を見つけた。近頃農場に狐がわがもの顔に出没しているというニュースの箇所である。前の晩パーティーの帰りに狐が車の前をよぎり、日本では狐が化けると話したが、この田舎の新聞記者は Wilde の言葉をもじって上手に記事を書いていた。

“To borrow half a phrase from Oscar Wilde, no doubt this was a case of the uneatable in pursuit of the edible.”

* 3月25日 デンマークのコペンハーゲンで、中世文学専門家の Aarne 教授宅でわれわれの送別パーティーがあったときのこと。話題が Oscar Wilde のことになって、案の定、都会的だ、皮肉屋だ、世紀末だ、という単語が飛び交ったが、イギリス大使館員が、Steven Berkoff の *Salome* の舞台を観たというナウいな話になった。ちょうど私が観た1990年2月のロンドン、リトルトンの舞台のものであった。古代イスラエルの王宮の舞台を、現代のロンドン社交界に移したのは、イスラエル王女 Salome をコメディ・オヴ・マナーズ劇のお嬢さん役に仕立てているようで面白い、象徴的な演技はよかったというの是一致的だが、彼にはバーコフの演技はスローモーション過ぎ、オーヴァーでどぎつく、ちょっと辟易したという。アンデルセンの国で Wilde の劇はこれまで上演されていないようであるが、ちょうど次の晩、王立劇場で上演される Bourmonville のバレエ *Folk Tale* を観ることになっており、ドワーやエルフ、トロールなど妖精が登場するこの舞台

の背景画と衣装は、マーガレット女王自らが担当され話題になっていた。Wilde の童話 *Happy Prince and Other Stories* や *A House of Pomegranate* には、アンデルセンのマッチ売りの少女も人魚も登場すると言うと、そうした Wilde ならデンマークにも向くかも知れない、いわば里帰りだからという。『幸福の王子』などがバレエに振り付けられ、マーガレット女王が舞台衣装をデザインすることになれば、天国の Wilde も喜ぶだろうという話でけりがついた。

* 3月29日 オックスフォード郊外の Colin Franklin の家に昼食に招かれたときのこと。アンティークとコレクションの部屋で、Wilde がモダレンの部屋で使っていた黄色いブラッシー張りのソファ(10年前に Lawlor が譲られた机はわが家に保存)に腰掛けながら、Wilde の詩の原稿の話に花がさいた。Colin は Shakespeare の本を最近出しており、Jeremy もそうであるがアンティークが商売であるのに、文学のことを学者より詳しく話題も豊富で、イギリスの典型的な Coniseur である。そうした人たちが Wilde の文学を愛しており、Jeremy が知人である夫人も愛蔵しているマニスクリプトや書簡がまだあるとのこと、現にロンドンのある本屋には Wilde の書簡が売りに出ているので、Ellmann が最後の集大成で、もうこれ以上の伝記研究はないというような諦めに陥る必要はないのである。

* 4月5日 ロンドンのヴィクトリア通りの Jeremy Mason の骨董品の店。Wilde の書簡のコレクターで Richard Ellmann とも親交のあった彼は、昨年 Wilde の手紙一通に解説と、挿絵を付け私家版で出している。お茶を飲みながら、話題はまたバーコフの『サロメ』になった。パントマイムが専門のバーコフの動きとポーズを重視し、めりはりのきいた象徴的な演技はサロメ劇に向く、リアリズムの演技だったらエロ・グロになってしまうということで一致した。しかし Jeremy が歌舞伎のような様式劇だから日本の舞台ではもてるだろうという意見には一応うなづいたが、伝統のある様式の演技の型と、バーコフ一人だけの型とでは大変な違いであり、バーコフ自身も模索状態のようで、型を作っては自分で破っているようで、二度三度と観ると不安定とわざとらしさが目立ち、様式劇とは呼べないと反論しておいた。しかしこの春日本にくるので、反響が楽しみである。

* 4月6日の *The Evening Standard* 紙上に、次のような広告が載っていた。“At £ 15.50, The Cadogan's Set Lunch merits an Oscar” という見出しで、あの Wilde が逮捕されたホテルの写真とメニューが書いてあり、最後に “But whatever you order, you can be sure of discreetly attentive service that has hardly changed since Oscar Wilde stayed here in the 1890's.” とあった。今までにない宣伝で変わったこと

があるように思い、この二年ばかりは家から近くなのに素通りしていたことを思いだし、さっそく三人の予約をし、翌日家族で行ってみた。Lillie Langtry Restaurant の装飾が少し変わり、バーの壁に Oscar と Lillie の写真が掛かっていることは変わらないし、バーテンダーの Michael Yates もいたが、ドリンクのメニューが大幅に替わっていた。しかしいつもの通りのカクテル、Hock & Selzer, Green Carnation, Genius を注文すると、Michael は参考書を見るからといって昔のメニューを取り出した。「このメニューはもうヴィクトリア&アルバート美術館行きなのだからお前の持っているのもそのうち値がつくから大切に保存しておけ」と言った。新しいマネージャーが案内してくれた Wilde が逮捕された部屋は、前とは別のところ（三つの説あり）なので、一体どこが本当の場所なのか再び迷蒙の中に入ってしまった。

* 4月7日 Savoy Theatre の出来あがり具合を見に行く。昨年往時の華やかさを惜しみながらヘルメットをかぶって、焼け跡の硝煙の匂いがまだ漂う悲惨な状態のなかを歩いたのが嘘のように、まだ建築中ではあるが、舞台の美しい白い壁、モダンなスチールの建材の中に中国の模様の壁もできあがりつつあった。しかし開館は1992年11月とのことである。ティー・タイムにロンドンのピアニストのメロディーに耳を傾け20年働いているウェイターと話しているうちに、ティー・ルームは Wilde 時代にはボール・ルームで、トロンプーユのように窓が描いてある壁扉を開ければ、いまま倍の広さになるとのこと。シティング・ルームの Gilbert と Sullivan の書簡や Lillie Langtry や Wilde の写真も前のままで「Wilde が若い友人たちを連れて滞在するので Savoy Hotel の評判に傷が付いた」という説明記事は、現在では Wilde でこのホテルは有名なのだから行き過ぎた、と昨年言っておいたのにそのままであった。

関西支部局だより

堀江珠喜

(協会副会長・大阪府立大学助教授)

1991年の関西支部局世紀末セミナーは、5月10日に山田勝先生から、ベルエポックの興味深いお話をうかがい、11月8日にはシャーロック・ホームズについて、同じく山田先生の講演のあと、御著書とお話をもとに私（堀江珠喜）が対談相手をつとめさせていただくという形式をとった。